

## 島田謹二『華麗島文学志』におけるエグゾティスムの役割

橋本 恭子

はじめに

第1節 フランスの研究における「エグゾティスム」と「外地文学」

第2節 『華麗島文学志』における「エグゾティスム」の役割

むすびにかえて

(要約)

比較文学者島田謹二は台湾における日本文学を「外地文学」として確立するため、「エグゾティスム」と「リアリズム」の必要性を等しく主張した。しかし、エグゾティックな作風で知られる詩人西川満編集の雑誌『文芸台湾』に拠っていたことから、中央文壇進出を目指す「エグゾティスム」推進派と見做され、従来批判的に論じられることが多かった。ただ、これまでの批判が島田の「エグゾティスム」観を明らかにしたとは到底言いがたい。島田の言う「エグゾティスム」とは、実際には内地読者に媚びるような「似非エグゾティスム」ではなく、抒情性や芸術性の同義語であると同時に、台湾本来の姿に内側から迫ろうとする試みであり、何よりも台湾に長期居住する日本人が自己に向き合うための一つの方法であった。本稿では島田が在日台日人文学について論じた『華麗島文学志』において、いかに独自の「エグゾティスム」論を形成し、展開していったか、フランスの外地文学研究書、及び近代日本文学における「エグゾティスム」の系譜を参照に、明らかにしていきたい。

はじめに

比較文学者島田謹二（1901-1993）は1929年から16年近い歳月を台湾で過ごし、1935年前後から40年代初頭にかけて、「華麗島文学志」という標題の下、台湾における日本人の文学現象について一連の研究論文を執筆、『台湾時報』を中心に発表してきた。島田はこの研究を通し、在台日本人の文学を日本の「外地文学」として確立したいと願い、1939年2月の論文「台湾に於けるわが文学」で、そのための指針として三つの方向を打ち出す。つまり、外地生活者の郷愁を歌う「郷愁の文学」、外地の特殊な景観描写を主とする「エグゾチスムの文学」<sup>1</sup>、内地とは異なる風土の下に内地には見られぬ異人種との共住を描く「リアリズムの文学」で、「これら三方面が相携へて、深刻雄大に発達することが何よりも望ましい」と主張した<sup>2</sup>。

ところが、1940年代に入って日本人と台湾人が共に文学活動を行うようになると、台湾文壇では約2年にわたり「エグゾティスム」と「リアリズム」をめぐる議論が展開され、「外地文学」の本質は「リアリズム」にあるとの共通認識が確立していく<sup>3</sup>。日台双方の論者は一連の議論を通じ、台湾の文学が内地から「エグゾティック」と見られるのは仕方ないにしても、作家たちはそれを意図すべきではなく、あくまで台湾という土地に根ざした「リアリズム」の文学を目指し、台湾文化の向上をはかるべき、との結論に達した。もっとも、台湾人作家の龍瑛宗（1911-1999）と黄得時（1909-1999）は「エキゾチシズム文学はあつてもいい」と文学の多様性を認め、台北高商講師の竹村猛も、「エグゾティスム」の真偽は素材に対する作家の態度に係わるものであり、「真のエグゾティスム」は今なお「取り出されるべき価値」がある、と一連の議論を締めくくった。この間、島田謹二も「台湾に於けるわが文学」を加筆修正し、「台湾の文学的過現未」（『文芸台湾』1941年5月）を発表、改めて「エグゾティスム」と「リアリズム」双方の必要性を主

張したが、全体的には「リアリズム」のみが受け入れられ、「エグゾティズム」の方は却下されたと見ていい。

またこれらの議論の過程で、黄得時が『台湾文学』（1941年9月）に「台湾文壇建設論」を発表し、文壇を「二つの型」— (1) 中央文壇進出をめざすエグゾティックな作風のグループと、(2) 台湾文壇建設を目標とするリアリスティックな傾向のグループ—に、かなり恣意的に色分けしたことから、「エグゾティズム」の『文芸台湾』派と「リアリズム」の『台湾文学』派という対立構造が形成された<sup>4</sup>。島田謹二自身は内地読者に媚びるような「エグゾティズム」には元々批判的で、「リアリズム」も積極的に奨励していたわけだが、「エグゾティズム」の代名詞のような作風で知られる詩人西川満(1908-1999)編集の『文芸台湾』に拠っていたことから、「エグゾティズム」推進派と見做されるようになった。

以来、近年に至るまで、「エグゾティズム」をめぐる議論は絶えないが、「エグゾティズム」と「リアリズム」を単純な善悪二言論によって差別化した上で、「エグゾティズム」の提唱者島田謹二に批判を加えるというやり方が常套になっており、実のところ、40年代の議論からさほどの進展はない<sup>5</sup>。善悪の価値判断を離れたところで島田の「エグゾティズム」観が検証されたこともなく、その本質は戦前から現在までほとんど明らかにされていない。そこで本稿では、島田謹二が『華麗島文学志』の形成過程でどのような「エグゾティズム」観を育むに至ったのか、そもそも「エグゾティズム」とは何なのか、島田が参考にしたフランスの外地文学研究や近代日本文学の「エグゾティズム」の系譜を参照しつつ、検証していきたい。

## 第1節 フランスの研究における「エグゾティズム」と「外地文学」

島田謹二は『華麗島文学志』の序論と結論にあたる論文、「台湾の文学的過去に就いて」（『台湾時報』、1940年1月）及び「台湾の文学的過現未」（『文芸台湾』、1941年5月）において、在台日本文学を研究するに当たり、1900年代から1930年代に出版されたフランスの研究書を参考にしたと明記している。そのほとんどは、エジプト、アルジェリア、西アフリカなど非ヨーロッパ地域に関するフランス人作家の異国表象を論じたものだが、島田の「エグゾティズム」観を考える上で重要なのは、ルイ・カリオ、シャルル・レジスマンセの共著『エグゾティズム—外地文学』（Louis Cario et Charles Regismanset, *L'Exotisme : la littérature coloniale*, Paris : Mercure de France, 1911）、及びロラン・ルベルの『フランスにおける外地文学史』（Roland Lebel, *Histoire de la littérature coloniale en France*, Paris : Larose, 1931）であろう<sup>6</sup>。二十年の間隔を経て現れた両書は基本的にはフランス文学史に沿って、フランス人作家の手になる異国や植民地に係わる作品を時代や地域ごとにまんべんなく分類・整理した総合的な研究である。島田は彼らの研究方法に決して満足していたわけではないが、「エグゾティズム」や「外地文学」の概念について、これら二書から得た影響は計り知れない。

興味深いのは、これらがいずれも1870年を「エグゾティズム」(exotisme)<sup>7</sup>から「外地文学」(littérature coloniale)へ移行する分岐点とし、第一部で前者を、第二部で後者を論じている点

である。実際、1870年というのは、フランスにとって帝国主義と植民地主義とが結びつき、帝国の再編成が行われた新たな時代の幕開けであった。この年に成立した第三共和制が植民地拡大政策をとった結果、フランスはチュニジア、安南、マダガスカルなどを次々と保護領とし、アフリカの数々の地方を手中に収め、全インドシナを支配し、19世紀末には一大植民地領有国となる<sup>8</sup>。こうした数々の植民地に於いて、フランス人がフランス語でものした、つまり、植民地統治者が植民地において母語で書いた文学が「外地文学」であった。それに対し、1870年以前の外国や植民地に関するエグゾティックな傾向の作品は「エグゾティスム」、あるいは「エグゾティスム文学」(littérature exotique)と呼ばれ、「外地文学」の前史をなす文学ジャンルと位置づけられた。

以下で、上記二書に沿って、「エグゾティスム」から「外地文学」への流れを簡単にまとめてみたい<sup>9</sup>。

### 1. エグゾティスム

ポスト・コロニアリズムのコンテキストで論じられるように、「エグゾティスム」には、確かに「帝国主義」や「植民地主義」的な側面があることは否定できない。しかし、戦前のフランス人研究者はこの語により広い意義を与えており、その起源は古代にまで遡る。それは旅に出た者が見知らぬ土地で目にした珍しい事物を語る「旅の物語」に発生し、代表作はホメロスの『オデュッセイア』であった。以後、「エグゾティスム」は十字軍の遠征、宗教戦争、修道会による布教の広がり、新世界の発見、ナポレオンの遠征などを経て、ヨーロッパの文学に占める割合を徐々に増大させていく。

フランスではまず、16世紀のアメリカ大陸の発見によって新世界の概念がもたらされ、アメリカの「野蛮人」とヨーロッパの「文明人」が対比的に描かれるようになった。植民地拡張に対する批判も現れ、「エグゾティスム」のタームはしばしば文明批判と結びつき、次の時代へと受け継がれていく。17世紀に入るとオリエント(中近東)への旅行熱が高まり、植民地も拡張し、文学にもその影響が現れた。旅行記や物語を通してオリエントのイメージが膾炙し、読者は「善良な野蛮人」(bon sauvage)や「エグゾティックな楽園」(Eden exotique)等、理想化されたイメージを見出していく。続く18世紀は「エグゾティスム」が思想家に多大な影響を与えた時代であった。旅行者の原住民に対する眼差しは哲学者に影響し、前世紀から引き継がれたヨーロッパ文明社会への批判、自然賛美の思想はこの世紀にいよいよ明確になる。モンテスキュー(1689-1755)、ヴォルテール(1694-1778)、ディドロ(1713-1784)、ルソー(1712-1778)等がいずれもオリエントや中国について論じ、「哲学的・批判的エグゾティスム」が形成された。通俗文学も依然としてオリエントのイメージをさかんに流布したが、世紀末には、フランスの「エグゾティスム文学」の源流、ベルナダン・ド・サン=ピエール(1737-1814)の『ポールとヴィルジニー』(1788)が登場し、以後、熱帯の自然描写というエグゾティックな叙述の技法がメジャーになる。19世紀に入ると、「エグゾティスム」はフランス文学の主流と連動しながら展開し、シャトーブリアン(1768-1848)の登場により、ロマン主義やピエール・ロティ(1850-1923)の作品に受け継がれた。

このサン=ピエールからシャトーブリアンへと繋がるロマン主義的「エグゾティスム」は安っぼ

い人道主義と感傷過多をはめ込んだ「似非エグゾティスム」であったが、商業的には大成功を収め、ステレオタイプ化され、19世紀を通して再生産される。一方、19世紀は新しい作家たちが、「エグゾティスム」の概念を塗り変えた時代でもあった。スタンダール(1783-1842)やメリメ(1803-1870)、ゴーチエ(1811-1872)、フロベール(1821-1880)などが理性的で客観的な「エグゾティスム」を創出し、高く評価される。世紀末にはピエール・ロティも現れたが、この世紀末を以って、「エグゾティスム文学」は「外地文学」へと移行していった。

## 2. 外地文学とリアリズム

19世紀末からフランスでは旅の質が変わったと言われるが、それは「発見の旅」から、征服を目的とする「政治的な旅」への変貌であった。この「政治的な旅」はやがて、宗主国の経済を支える工業原料の獲得と販路の拡大という経済的な目的を備えた植民地経営に変わり、文学もまた植民地の発見・開発・経営の段階に応じて変質した。島田がカリオ、レジスマンセの論文から引用した通り、「外地文学」には三つの発展段階が見られる。即ち、(一) 軍事的征服、未開地の探検時代のもの、(二) 探求調査の組織化時代のもの、(三) 物情平穩に帰して移住民がはじめて物心両面の開発を志ざし、所謂「純文学」の生まれる時代のもの、である<sup>10</sup>。(一)の段階では戦記・紀行等の文学、(二)では植民地経営に必要なマニュアルとして、「テクニカル文学」(*littérature technique*)と呼ばれる「地理・歴史・言語・人種・宗教・風俗等に関する研究書」などが生まれた。

「外地文学」の中核となったのは、もちろん(三)の時代の文学である。「エグゾティスム文学」が基本的に「旅」の文学であったのに対し、「外地文学」は植民地に移住した、あるいは植民地で生まれたフランス人作家によって書かれた文学であった。場合によっては植民地に赴いた旅行者の制作が含まれることもあったが、「外地文学」(*littérature coloniale*)と「外地観光文学」(*littérature de tourisme colonial*)とは区別され、後者の評価は低い。「エグゾティスム文学」は1870年以降、「外地観光文学」の中に生き延びるが、大半は現実に符合しない、ただ本国の読者を楽しませるだけの「似非エグゾティスム文学」であった。

「外地文学」は、実はこうした表層的な「エグゾティスム」に対する反動として生まれる。元々「エグゾティスム文学」にはイメージーションに依拠した主観的な作り物の感が強かったが、植民地の作家は原住民をも含めた植民地居住者の生活を、あくまでも現地に根ざした視点からリアルに描こうとした。「外地文学」とは何よりも植民者から見た植民地の「真実」を描き、本国の人々に植民地とは何か啓蒙することを目的とした「リアリズム」の文学だったのである。カリオ、レジスマンセ、ルベル等文学研究者もそれを肯定的に評価した。

以上の通り全体的に見ると、フランスの「外地文学」研究においては「リアリズム」が圧倒的優位に置かれ、「エグゾティスム(文学)」に対する評価は決して高くない。フランス文学者木下誠によると、フランスの植民地作家たちは「全員が自然主義文学の継承者であった」と言うが、研究者も多かれ少なかれそれを支持する傾向にあったのであろう。しかし、植民地作家が「いかに、ヨーロッパの植民地の現実を細かく描こうとも[...]、それは、彼ら自身の世界、すなわち植

民者の白人の世界のことを描いているにすぎな」かった<sup>11</sup>。

但し、16世紀以来の「エグゾティスム」の流れからも明らかのように、フランスでは非ヨーロッパ世界に対し、決して一面的なオリエンタリズムを形成してきたわけではなく、後にサイドに批判されるようなオリエントに対する支配的なイメージを流布させたと同時に、文明批判や人道的観点からの反植民地思想も早くから芽生えていた。しかし、そうした思想が充分成熟しないまま、結局は植民地主義・帝国主義の大海に飲み込まれ、20世紀に至るのである。

島田謹二の言う「エグゾティスム」も、決して「赤い色をした廟の屋根とか、城隍爺の祭りとか、媽祖の祭典」<sup>12</sup>などのステレオタイプに収斂されてしまうようなものではなく、背後にはフランスで数世紀にわたって展開されてきた「エグゾティスム」の種々相が含まれていた。しかし、いかに多様な花を咲かせようと、フランスでも「エグゾティスム」にはマイナス評価が下され、「リアリズム」に軍配が上がったのである。1940年代の台湾文壇の議論を待つまでもなく、島田は『華麗島文学志』の出発点において「外地文学」の本質が「リアリズム」にあることをすでに理解していた。「リアリズム」には植民者から見た植民地の「真実」をより効果的に描出し、植民地の「擁護と顕揚」に大いに貢献できる機能があることも十分察知していたのである。

カリオ、レジスマンセ、ルベル等文学研究者も、世界に散在する植民地の存在を本国の読者に知らしめ、偉大なるフランスを再認識させるという「帝国の任務」を負って、「外地文学」の特性や役割を明らかにしたのであった<sup>13</sup>。島田謹二もそれに倣い、台湾の日本文学を「外地文学」として史的に整理・考察しようと試みる。「文芸史の研究者としては、特に彼が外地居住者であるならば、その地の文学的事実を明らめ、これを本土に報ずることは、彼がその地に対して負ふ一種の義務であるとさへ考へられる」<sup>14</sup>と言うように、島田もまた「帝国の学者」としての使命を十分自覚していた。但し、島田はフランス人の研究を大いに参考にしながらも、むやみに模倣はせず、台湾の状況に合わせて独自の「外地文学」論を展開させていくのである。

## 第2節 『華麗島文学志』における「エグゾティスム」の役割

### 1. 「外地文学」の理想

島田謹二の「外地文学」論の特長は、何と言っても「エグゾティスム」を「外地文学」の必要条件とし、「エグゾティスム」と「リアリズム」は「相並んで開拓・深化・拡大」すべきである、と主張した点にある。「外地文学」、「外地観光文学」、「エグゾティスム文学」の三者、あるいは「リアリズム」と「エグゾティスム」を区別するのではなく、むしろ積極的にそれらを融合させようとしていた。島田は「旅行者」としての眼差し、つまり「土着人移住民の鈍麻した感覚にうつらぬ、新鮮なものをめざましく取り出」そうとする視点を重視し、「外地観光文学」でも優れたものは「外地文学の本核の一つ」と見做してもよいとしたのである<sup>15</sup>。但し、「外地文学」の核心はあくまでも「外地居住者の制作」であった。

島田のこうした主張は、『華麗島文学志』の中で最も完成度の高い論文「佐藤春夫氏の『女誠扇綺譚』」（『台湾時報』、1939年9月）に最も鮮明に現われている。佐藤春夫は1920年7月に訪

台、約3ヶ月を過ごし、内地に戻ってから5年の歳月を経てようやく、台南の廢港を舞台に殺人事件を絡めた小説「女誠扇綺譚」（『女性』、1925年5月）を発表する。主人公は台南に在住する日本人新聞記者であるとはいえ、作者が旅行者であることと、紀行文を骨子の一半としているという点で、この小説はフランスの研究に照らせば、明らかに「エグゾティスム文学」の伝統を引き継いだ「外地観光文学」の категорияに分類されるだろう。島田は実際、この小説の中に「エグゾティスム文学」の条件をつぶさに読み取ろうとする。まず、「灼熱の自然」や「廢港安平の荒廃美」、「根強く大陸的な」人物といった外地の景観人情。次に、「行為とか性格とかに重きを置かぬ、気分と情調を主」とする作風、さらに「作者の精神ともいふべき感情生活や思想生活や——さういつた作者自身の<sup>ペルソナリテ</sup>personalitéがかなり大きな意味を帯びて作中に露出」し、「主観的な論議的な要素」が作品の中で大きな位置を占めているロマン主義的な傾向。「支那人の性格や台湾植民史への文明批評的警句」はもちろん、台湾人に対する「<sup>ユマニスム</sup>humanismeの精神」も盛り込まれている。また、沈家の祖先が築いた富を台風のため一夜にして失ったという文明と自然との対比、「私」＝日本人＝統治者の「自棄・頹廢」的な感情生活に対し、台湾人の若い女＝被統治者の「生きた命を氾濫にまかせて一切を無視する」、「蛮的な生命礼賛の思想」も明らかである。描写についても、「流説・伝説・空想・写生」の方法を混交し、しかも「一脈の詩情が流れている」点など、いずれも典型的な「エグゾティスム文学」を構成する要素ばかりであった。

こうした読みが正しいか否かは一先ず置くとして<sup>16</sup>、島田はこのような「素材と扱ひの二方面」、つまり語られる「思想内容」と語る「表現形式」の双方を以って、「女誠扇綺譚」を「<sup>シャトオブリアン</sup>Chateaubriandや<sup>ピエール・ロチ</sup>Pierre Lotiやの創めた様式」に属する「エグゾティスム文学」と見做し、高く評価したのである。但し、島田が参考にしたフランス人の研究では、「<sup>シャトオブリアン</sup>Chateaubriandや<sup>ピエール・ロチ</sup>Pierre Lotiやの創めた様式」に属する「エグゾティスム文学」というのは決して褒め言葉ではない。ところが、島田は別の論文「台湾の文学的過去に就いて」でも、「典型的な異国情趣の文学」である「女誠扇綺譚」は立派な芸術的価値を備えており、「外地観光文学」の皮相なレベルを越え、「外地文学」として名乗りを上げて差支えない、と太鼓判を押しているのである。しかしまた一方で、オーストラリアの女性作家リチャードソン夫人(Henry Handel Richardson)<sup>17</sup>の三部作“The Fortunes of Richard Mahony”(1917~29)のような「本格的な『外地小説』」と比べると、「女誠扇綺譚」は「本格的な『外地文学』ではない」と、批判を加えてもいる。リチャードソン夫人の作が「本格的」と言われるのは、それが力強い「リアリズム」に支えられているからであった。

「女誠扇綺譚」に対する島田のこうした評価は、どこか矛盾しているように見える。元々「外地文学」、「外地観光文学」、「エグゾティスム文学」がそれぞれ異なるジャンルを形成し、目指すところを異にしているのであれば、「女誠扇綺譚」を「外地観光文学」や「エグゾティスム文学」として評価すればいいだけで、「外地文学」の categoriaに加えた上で批判する必要はない。性格を異にするこの「小さな佳品」に対して、「共存する異民族の生活解釈の文学としては十分に志向してもゐないし、出来栄も十全だとはいへぬ。[...]本格的な外地文学の本流にまでは勿論達してゐない」<sup>18</sup>というのは、少々酷であろう。また、島田がリチャードソン夫人のような作品を以って、「本格的外地文学」というなら、何も「女誠扇綺譚」に「外地文学」として名乗りを上げさせ

る必要はない。

しかし、島田は「外地文学」の中に、どうしても「エグゾティスム」の要素を導入しようとしていた。それにはいくつか理由があると思われるが、何よりも島田にとって、従来の在台日本人の文学が「勁いものと剛いもの」の表現にのみ傾き、「あはれなるものうるはしいもの」に欠けていたと思えたことが、最大の要因であろう。島田はこうした「跛行性」が「すべての外地文学の宿命にもたらされる欠陥」であり、「強健雄偉な文学はRudyard Kipling<sup>ラヂアード・キップリング</sup>その他例を求めるに窮せぬが、繊麗婉美な文学は容易に見出し難い」と、常々感じていたようだ<sup>19</sup>。

元々、島田の中にエグゾティックでリリックなものを好む傾向があったのは確かであり、ピエール・ロティ<sup>20</sup>に対する評価がそれを物語っている。前述のフランス人研究者たちはいずれもロティの典型的な「外地観光文学」的「エグゾティスム」に対して批判的であったが、それを重々承知しながら、島田は敢えてロティ的な香りを、台湾の「外地文学」に加えようとしたのである。実際、その当時、島田の周辺にはロティの名が頻繁に登場する。前嶋信次(1903-1983)は島田の勧めで「ロティと澎湖島と天人菊」という一文を『台湾風土記』(巻参、1939年10月)<sup>21</sup>に発表し、ロティの「クールベール提督の死について」(『文芸台湾』1-4、1940年7月)を翻訳した。新垣宏一(1913-2002)も小論文「ピエール・ロティと台湾」を『台大文学』(5-1、1940年3月)に発表している<sup>22</sup>。島田本人も1941年9月13日、台北高等学校の「西洋文化研究会」で、「南海を描ける西洋文学」のテーマの下に英・仏の外地文学について論じ、ロティに言及した。おそらくロティの文学的価値を認めていたというより、その叙情的で、「繊麗婉美」な味わいを好んだからであろう。但し、この研究会に参加した加藤東雄の報告によると、島田はロティを「外地文学」モデルの最上位に置いていたわけではなく、むしろ「文学的作品として眺めるとロチ派のエキゾチシズム・リリズムとモーム派の実験小説を合はせもつコンラッド系統を南海方面の文学の理想」として挙げていたという<sup>23</sup>。つまり、「エグゾティスム」＝「あはれなるものうるはしいもの」だけではなく、「リアリズム」に通じる「勁いものと剛いもの」の要素を積極的に評価し、双方合わせ持つ作品を「外地文学」の理想としたのであった。

しかし、台湾に於ける日本文学が二つの傾向をバランスよく育ててきたかという点、俳句は領台直後から一貫して子規系統の「客観写生」が主流で、短歌も台湾最大規模の歌誌『あらたま』が『アララギ』的リアリズムの洗礼を受けた「写生歌」であったように、伝統文芸はいずれも写実的な傾向が強かった。散文も充分成長しなかったとはいえ、「写生文」の小品に優れたものが残っている。しかし、島田の眼には、それらが日常生活の素朴な写実的再現の内に、人生の深い意味を彷彿させる点では、それなりの成果を挙げえたかもしれないが、反面「写生」に徹するあまり、「芸術品としてもつべき馥郁たる香芬をそれだけ乏しくさせた」と映ったのであった<sup>24</sup>。そうした背景にあって、「女誠扇綺譚」はまさに在台日本人の文学、特に「散文物語」のジャンルに欠けていた芸術性に富む「詩魂のlyrisme<sup>リズム</sup>を以って貫いた艶治極まる異国情緒文学」として登場したのである。その点では高く評価されてしかるべきであり、その傾向は発展させていくべきであった。

一方、在台日本人の文学が「写実」を主流に展開されていたといっても、せいぜい日常生活を対象とした短歌や俳句に発揮されていた程度で、散文・小説の方面では、明治末期に庄司瓦全・

影井香橋・原十雉等が写生文の領域を開拓したものの、風俗小品のレベルに止まったまま本格的な写実小説に発展することはなく、後継者も育たなかった<sup>25</sup>。プロレタリア・レアリスムの影響下にある作品については島田は固より認めていなかったが、黄得時と親しかつたこともあり、少なくとも 1930 年代半ばに創刊された台湾人編集の『台湾文芸』と『台湾新文学』には眼を通していた可能性が高い<sup>26</sup>。両誌には台湾に生きる下層階級の日本人や貧しい台湾人を描いた、谷孫吉・英文夫等在台日本人作家の小説も散見するが、いずれも作品としての完成度は低く、「女誠扇綺譚」の芸術性に匹敵する本格的な「レアリスム」小説は出ていなかった。実はここにこそ島田が同作品を「外地文学」のカテゴリーの下で、エグゾティックでリリックな要素を賛美する一方、「レアリスム」の観点から批判しなければならない理由があったのではないだろうか。「女誠扇綺譚」がいくら優れているとはいえ、結局は旅行者の手になる「エグゾティズム文学」に過ぎず、骨太な「レアリスム」には欠け、「外地文学」の本流とはなりえないことを強調することによって、島田は逆説的に台湾居住者による「本格的な外地文学」の誕生を願う気持ちを表明したのであろう。島田は「佐藤春夫氏の『女誠扇綺譚』」の最後を次のように締めくくっている。

更にまた台湾の内地人文学として、この名品はあとにもさきにも類のない絶品であるが、後来今日の読者としては、これを乗り越えた新しき作家が続出し、旅行者として見た台湾以外に、ここに根をおろした生活を根底から剔剥したやうな散文物語、例せばRichardson 夫人やJean Marquet<sup>リチャードソン</sup>やの外地小説と肩を並べる逸品が踵を接して現はれんことを華麗島文学のために希望してやまないのである<sup>27</sup>。

島田謹二は台湾居住者の手によって、「エグゾティズム」と「レアリスム」の融合した作品が生まれることを切に願っていた。その思いが「女誠扇綺譚」に対する賛美と批判に込められているのであろう。

## 2. 「エグゾティズム」批判を超えて

確かに、台湾における日本文学のある傾向に「エグゾティズム」という名称を与え、一つの文芸ジャンルとして確立しようとしたのは島田謹二であろう。だが、このテーマは在台俳人によって、すでに充分議論されていた。それは俳句が季題を前提とし、身の自然や生活を詠む文学であったことと関係があるだろう<sup>28</sup>。

台湾の俳句は正岡子規（1867-1902）門下の有力な俳人渡辺香墨（1866-1912）が台湾総督府法院検察官として 1900 年に渡台して以来、法院関係者を中心に盛んになり、香墨によって台湾の土地に立脚し、台湾の風物を詠む、一種の「地方主義」俳句「台湾俳句」が誕生した。しかし、内地で子規門下の河東碧梧桐（1873-1937）が新傾向を唱えるや、台湾の俳壇も二分し、在台俳人たちも内地風の句のみをつくるようになる。こうした傾向を改め、再び俳人たちの目を台湾島内に向けさせるのが、俳誌『ゆうかり』の主催者山本<sup>ようこう</sup>江<sup>29</sup>であった。1921 年、山本は高雄税関から台北の中央研究所農業部に転勤して間もなく、『ホトトギス』系の『ゆうかり』を創刊、1931 年頃

からは、「台湾という特殊な環境に立脚した台湾俳句」を主張し、進むべき方向が定まる<sup>30</sup>。雑詠選者の村上鬼城<sup>31</sup>と池内たけし<sup>32</sup>も台湾独自の風物を詠むよう指導し、在台俳人は次第に台湾の特色に着目するようになった。台湾俳壇にとってそれは確かに「特筆すべき方向転換」であったが、同時に新たな弊風を生んでしまう。つまり「椰子・榕樹・水牛・相思樹」等、台湾に特有な俳材を羅列し、「実状を知らぬ内地在住の選者に媚びんとする傾向」、島田の言葉でいえば、「似而非エグゾティスム」である。

台湾の俳句はそもそも内地との繋がりが深く、『ゆうかり』のみならず、花蓮港に拠った俳誌『うしほ』なども『ホトトギス』系であり、同人たちは『ホトトギス』の雑詠に当選することを目指していた<sup>33</sup>。しかし、台湾を知らない内地選者に、台湾の自然に即した句をわからせようとするには無理があり、内地俳壇で認められようとするれば、台湾の自然を内地風に歪曲するか、反対に台湾色を極度に強調するかによって、選者の眼を惹くしかなかった。そうした弊風が「台湾の俳壇を毒したことは非常なもの」であったという。

それをめぐってなされたのが、「エグゾティスム」についての議論といってよいだろう。俳句が本来季題を前提とした「景観描写」の文学である限り、身近な台湾の自然や生活を読むのはごくあたりまえのことである。しかし、それは決して台湾特有の俳材によって、内地読者の好奇心に訴え、内地俳壇で名をなすためではない。それゆえ山本孕江等は徒に台湾的俳材を散りばめ、台湾色を強調した「類型的内地向きの台湾俳句」—例えば、「夏の月に胡弓弾きつつ土人哉」や「支那芝居バナナ食みつつ立見哉」—を「台湾月並」と呼び、真の「台湾俳句」、つまり「十七音定型俳句により台湾本来の姿を把握したもの」と区別し、排撃した。

元々『ゆうかり』は「写生俳句」を主張する俳誌であるが、「写生」によって「台湾本来の姿」を捉えようとする、台湾の風物を徒に散りばめて台湾を「不自然に強調」するのではなく、「台湾の特徴を内面的に捉へ」ることにより、「おのづとにじみ出る」ようにしなければならない。推奨すべき佳句として、「春光や椰子の落花をてのひらに」（芳仲）や「うらぶれの身を廟の扉に日向ぼこ」（二溪）などが挙げられているが、このように極めて台湾的な素材を用いても、優れた「台湾俳句」になるか、「台湾月並」に陥るかは、作者の「似非エグゾティスム」に対する批判能力の有無とも関係があるだろう。こうした一度「似非エグゾティスム」批判を通過した「台湾俳句」を、島田謹二は敢えて「エグゾティスム」と呼んだのである。

ところで、島田が「エグゾティスム」の根拠を、内地とは異なる台湾の特殊な「景観描写」に置いていることは確かであり、それは「台湾に於けるわが文学」など、他の論文でも度々主張されている。但し、従来の「景観描写」について、島田は「土俗的外表的な風俗描写が主であって、多く傍観者の眺めた外面的興趣に溺れがち」とあり、「似非エグゾティスム」的傾向を厳しく批判した。島田が「エグゾティスム」と考えるのは、「傍観者」＝「旅行者」が外側から表層的に台湾の景観を眺めたところから生じるものではなく、「台湾の風物と生活との或側面を客観化」し、「真にその土地に住むものの心理的特性を把握した作品」のことであった<sup>34</sup>。それ故、島田の言う「エグゾティスム」の主な担い手は、在台俳人のような台湾をよく知る居住者でなければならず、山本孕江の主張する「台湾俳句」はまさに島田の理想とする「エグゾティスム」に合致した

のである。

こうした在台俳人による台湾に立脚した「台湾俳句」という方向づけは、文芸の在り方そのものを刷新することになった。つまり「台湾本来の姿を把握」した「台湾俳句」を詠むとなると、一介の旅行者では無理で、台湾在住者、少なくとも台湾生活経験者でなければ難しい。読者も同じく台湾在住者でなければ、それを理解することは不可能であろう。それゆえ、1935年頃から『ゆうかり』同人たちの間に、雑詠の選者に「台湾在住者を出せ」という声が起こり、36年には村上鬼城・阿波野青畝<sup>35</sup>等、長らく日本内地から『ゆうかり』を育てた選者がはずれ、山本孕江がその任に当たることになった。こうして「台湾俳句」は、在台日本人が台湾で制作し、台湾の俳誌に投稿し、台湾在住の選者が選ぶという、一種の「自治」状態に到達する<sup>36</sup>。そうすると在台俳人が「椰子の花」や「廟の扉」など台湾的俳材を用いるとしても、それはもはや内地読者の気を引くためではなく、台湾居住者でなければわからない生活に密着した情趣を詠い、同じ体験を共有する読者と分かち合うためとなった。

しかし、外地の文芸が一種の「自治」に到達したとき、「外地景観描写の文学」は依然としてエグゾティックたりうるのだろうか？島田はこうした「文芸の自治」という枠組みの中で、台湾で自足する「景観描写」をも敢えて「エグゾティズム」と呼んだ。しかし、「エグゾティズム」とは基本的に異国の風物を眺める視線から生まれる感興であり、作品化されたそれをエグゾティックなものとして受取るのは作者本国の読者である。しかし、外部の読者を必要としない、植民地居住者による、植民地居住者のための「エグゾティズム」など存在するのだろうか？それとも、台湾の日本人文芸が次第に自治を獲得していく中で、居住者による、居住者のための「エグゾティズム」も可能になったのだろうか？以下で、この問題について検討してみたい。

### 3. 自己異化の「エグゾティズム」

俳句の世界では1935年頃から、在台の日本人作者が創作し、同じく在台の日本人読者が鑑賞するという、一種の「自治状態」が形成されるようになったが、実は他の文芸ジャンルもこのころから内地の中央文壇ではなく、台湾内部に目を向けるようになっていた。

1935年と言えば、施政40周年を迎え、台湾総督府がそれを記念して「熱帯産業博覧会」を開催した年である。浅野豊美によると、それはまた「台湾が政治・文化・交通の面で急速に本土と連結され、[...]内地化の本流に飲み込まれようとしていた年」であったという。こうした中で、在台日本人の中に、単なる中央に組み込まれた地方にとどまらない、台湾に根を下ろした「在台湾」意識ともいべきものが芽生え<sup>37</sup>、彼らの視線は次第に日本内地から台湾島内に向けられるようになっていった。内地帰還のチャンスを断り、しばらく台湾に残ることを決意した島田謹二も、日本から台湾に戻ったばかりの西川満も例外ではない<sup>38</sup>。

そもそも島田謹二が領台以来の日本人の文学について、本格的な研究を思い立ったのは、1935年前後のことである。西川満も1933年4月、早稲田大学を卒業して帰台、翌年1月に台湾日日新報社に入社し、同紙の文芸欄を復活させたり、媽祖書房を設立したり、豊富な財力と人脈をバックに精力的に文芸活動を展開していた。そうした過程で、島田も西川も実業ばかりが幅を利かせ、

文芸が軽視される台湾社会の風潮や、中央文壇の流行ばかりを追いかける文芸愛好者の傾向を憂え、台湾で独自の文芸を發展させることが急務であると考えようになったのである。1937年に日中戦争が勃発し、戦時下における文芸の役割が改めて意識されるようになると、彼らの思いは切実さを増した。やがて、島田は理論方面から、西川は実作方面から尽力し、1939年末には台湾文芸家協会が結成され、翌年1月には『文芸台湾』が創刊される<sup>39</sup>。

島田謹二が「台湾に於けるわが文学」で、在台日本人作家たちに対し「エグゾティズム」の必要性を説いたのは、台湾文壇が再編成に向けて歩み始めるまさにこの時代、1939年2月のことであった。中央文壇進出よりもむしろ、台湾島内の文芸レベルの向上を図り、文芸の自治を確立することが喫緊の課題であったからこそ、台湾の現実と向き合い、表現していくことが求められ、そのための指針の一つとして「エグゾティズム」が主張されたのである。

ところで、当時の島田の「エグゾティズム」観を考える上で見逃してならないのが、フランスの研究とは別の参照軸、つまり近代日本文学に於ける「エグゾティズム」の系譜であろう。それがかなり強力に作用しているため、島田の言う「エグゾティズム」は複雑な様相を呈することになった。

比較文学者菅原克也は、「日本近代詩におけるエキゾティシズムは、日本を支配者の側に置く、単純な二項対立の図式によってのみ説明されるものではない。それは、ヨーロッパという項をも媒介とする、より複雑な力学関係のなかに位置づけられるべきものである」<sup>40</sup>と述べているが、すでに多くの研究者が指摘しているとおり、近代日本文学に現れた「エグゾティズム」は、日本人自身が異国、特に非西欧圏に対する憧憬や想像を創作の基本的モチーフにするというより、自らを西欧人の眼差しに同化し、東洋の「エグゾティズム」を再発見するという構造を有して現れた<sup>41</sup>。菅原はこれを「ヨーロッパという回路を迂回しての、あるいはヨーロッパを媒介してのエキゾティシズム」<sup>42</sup>と呼んでいる。

近代日本文学に「エグゾティズム」が登場するのは、まず西欧近代詩の翻訳を通してであるが、菅原は最も早い段階での南方「エグゾティズム」を森鷗外(1862-1922)の翻訳詩「ミニヨンの歌」(『於母影』、1889)に見ている。『レモン』の木は花さきくらき林の中に／こがね色したる柑子は枝もたわゝにみのり」で始まるこの詩に、日本人読者は「ヨーロッパの視点からの南国への憧憬」を読み、「エグゾティズム」を経験したのであった<sup>43</sup>。続いて登場した上田敏(1874-1916)の『海潮音』(1905)は、島田謹二に『海潮音』ほど西欧の異国情緒の本質を示したものは今迄一つもなかった」と言わしめるほど、近代的「エグゾティズム」の息吹に満ちていた<sup>44</sup>。こうして日本語に翻訳された西欧近代詩を通し、日本人は西洋人が非西洋圏に注いだ眼差しを獲得していく。

また、『海潮音』に満ちる異国情緒の美は、新世代の青年たちを魅了し、特に木下杢太郎(1885-1945)や北原白秋(1885-1942)はそれを創作の核とした。島田は青年時代から彼らの作品に親しみ、実際、親交も深かったのであるが<sup>45</sup>、白秋の『邪宗門』(1909)や杢太郎の『食後の唄』(1919)に収められた数々の詩篇は日本近代詩に於ける「エグゾティズム」の性格を決定すると同時に、島田が「エグゾティズム」を論じる際の基準になった。

白秋の『邪宗門』は近代日本文学に於ける「エグゾティズム」の同義語として必ず引き合いに出されるが、ここには二重三重に屈折した複雑な「エグゾティズム」の様相が見られるという。彌永信美はあまりにも有名な巻頭詩「邪宗門秘曲」について、「日本人から見た『南蛮渡来』のキリシタン文化に対するエグゾティシズムが前面に置かれているが、そのエグゾティシズムには、逆にキリシタン宣教師から見た『東洋の果て』の日本に対するエグゾティシズムが、いわば二重写しにされているようである」<sup>46</sup>と述べている。白秋にとって、まず「エグゾティズム」の対象となるのはヨーロッパであったが、そのヨーロッパのオリエンタリズムを通して、再び視線は日本に戻って来るのである。

白秋に見られるこうした「ヨーロッパ製オリエンタリズムの力を『逆利用』して、日本そのもの—自分自身をエグゾティックな感興の対象にする奇妙に倒錯した精神」<sup>47</sup>というのは、白秋の盟友木下杢太郎にも働いていた。もともと白秋や吉井勇（1886-1960）等『パンの会』の詩人たちに、「南蛮趣味」や「江戸趣味」をもたらしたのは木下杢太郎であるが、彼もまたフランスの高踏派と印象派の詩や絵画、それにヨーロッパでもてはやされたジャポニスムという西欧人の眼差しを通して、九州の辺境に花咲いた「南蛮文化」や、急速な近代化の下に廃れゆく「江戸文化」をエグゾティックなものとして再発見していったのである。杢太郎にとって、それは「伝承主義でも、古典主義でも、国民主義でもなく、やはりエキゾチスムの一分子」に他ならなかった<sup>48</sup>。

実際、杢太郎や白秋によって開花した東西の眼差しが複雑に交錯した芸術観は、「鷗外・敏によってはじめられた西欧、とりわけフランスの晩近の文学・芸術摂取のひとつの到達点」<sup>49</sup>と言えるだろうが、島田のいう「エグゾティズム」、特に近代詩に関する部分は、まさに鷗外・敏・杢太郎・白秋の流れに貫かれていた。

南方の植民地台湾を舞台にエグゾティックな詩を書いた伊良子清白と西川満についても、島田はこうした日本的「エグゾティズム」の系譜に位置づけ、読み取ろうとしている。

詩集『孔雀船』（1906）で知られる伊良子清白（1877-1946）は、河井醉茗（1874-1965）・横瀬夜雨（1878-1934）とともに『文庫』派の三羽鳥と称された詩人であるが、本業は医師で、1910年5月から1918年4月まで<sup>50</sup>、台湾総督府医務嘱託として主に台中で生活した。医師として多忙を極めたためか、台湾をテーマとした「聖廟春歌」と「大嵯嵌悲曲」<sup>たいごかん</sup>を書いたのは帰国後約10年を経た1927年の頃である<sup>51</sup>。

島田謹二は「聖廟春歌」について、清白を佐藤春夫と並べ、台湾に於いて「エグゾチスム文学を創作した先駆者」と位置づけている。しかし興味深いのは、島田がこの詩に、内地とは異なる台湾の景観を直接目にした清白の驚きや感興を読み取っているのではなく、ヨーロッパのオリエンタリズムを経由して東洋に注がれる、日本独特の両義的「エグゾティズム」を読み取っている点である。

自分の考えでは、明治末葉の台湾に来た内地人で、かういふ東邦的世界を台湾の中に発見し、それをかういふ映像で壮麗な詩句に盛り上げたのは、新詩壇そのものに漲溢してゐた異国憧憬（エグゾチスム）の感化はいふまでもないが、実は彼が西洋文学、特に独逸浪漫派系統の文

学——Rückert や Heine の「東方趣味」に親熟してみたことが大きな地盤を成してみたからではなからうか。[...] Heine その他の東方詩はかなり深く色読してみたので、それから開眼されたその種の骨法を、渡台後は、この島の風物に応用してみたのではあるまいか<sup>52</sup>。

島田がここで明かにしているのは、清白が「台湾」をエグゾティックな対象として詩的に言語化するためには西欧及び日本近代詩の媒介が必要であり、それ抜きに「台湾」は詩人の前に「異国的に珍奇な映像」として立ち現われてはこなかった、という点である。清白は台湾に8年近く居住していたにもかかわらず、直接台湾に向き合ったときの感興を表白したのではなく、帰国後10年も経て、西洋詩或いは日本の近代詩を媒介に、それを表現し得たのであった。島田が見抜いたのは、清白のテキストと西欧／日本近代詩の間に存在する「エグゾティスム」を巡る内的連関である。

おそらく西川満の場合も同様であろう。フランス文学と日／欧近代詩を文学的経験として出発した西川も当然、日本的「エグゾティスム」の表現形式を身につけていた<sup>53</sup>。というより、これがなかったら、西川には「ありがたや春。われらが御母、天上聖母。媽祖様の祭典。」で始まる、あの「媽祖祭」の詩など書けなかったのではないだろうか。というのは、彼にはエグゾティックな幻想を抱くほど、台湾との間に距離がなかったのである。わずか満2歳で台湾に渡り、高校・大学時代の6年間を除いて、ほとんどを台湾で過ごした彼が、台湾色濃厚な景観や風俗にエグゾティックな感興を抱き続けたとは考えにくい。西川自身、「同じ台北の古い街でも、マンカにはあまり興味がもてない。それは純然たるシナ風の街だからである。大稲埕には異国人が住んでいたの、東洋と西洋の混淆が見られ、それがたまらなくわたしには魅力だったのだ」<sup>54</sup>と語っている。西川にとって、大稲埕は西欧に対する憧れを喚起すると同時に、西欧人の眼差しを通して台湾を再度エグゾティックな対象に変換しうる「場」だったのであろう。幼い頃から親しんできた日本や西欧の近代詩が、西川にそうした感受性を育んだに違いない。

実際、詩集『媽祖祭』(1934)を手にした内地の詩人や文学者たちが西川に寄せた反響からは、西川の「エグゾティスム」を歓迎する土壌が日本の詩壇に存在していたことが窺える。萩原朔太郎(1886-1942)は「装丁、内容共に支那風エキゾチックの香気高く、芸術味の豊かなるに感銘仕り候」、西脇順三郎(1894-1982)は「旧来になく異国風な詩集として失礼ながら驚きました」、木下杢太郎も「挿入の台湾語は北平の方言と殊り一層異国情調を感申候」と、いずれもエグゾティックな側面を高く評価している。恩師吉江喬松(1879-1940)も「全編に溢るる歡喜と悲調と、東西詩風の渾然たる溶合と、我が日本の詩壇はこの南方光の国の詩人の出現をいかに悦んで迎へることでしょう」と、手放しで褒め称えた<sup>55</sup>。他にも矢野峰人(1893-1988)、伊良子清白、室生犀星(1889-1962)、堀口大学(1892-1981)、山内義雄(1894-1973)、寿岳文章(1900-1992)らが賛辞を寄せている。西川の師の世代に当たるこれらの詩人、文学者たちもまた多かれ少なかれ日本的「エグゾティスム」の流れを支えてきたことを思うと、西川の詩的源泉や技法が台湾特有の風土とだけ特権的に結びついていると考えるべきではなく、むしろ日本の詩的伝統の中から内在的に導き出されたと見る方が妥当であろう。

ところで、「エグゾティズム」は「空間的・時間的距離が生む異質さの感覚と、それによって喚起される想像力の働き」<sup>56</sup>と定義されるが、いくら台湾が日本人にとって異国情緒豊かな場所であっても、台湾との間に「空間的・時間的距離」を持ち得ない長期居住者にとって、それをエグゾティックな感興の対象と捉えることは容易ではない。1929年に渡台した島田謹二もまた、『華麗島文学志』関連の論文を集中的に書いていた当時、台湾での生活が10年にもなる長期居住者であった。台湾の景観をエグゾティックと感じることは、島田自身相当困難だったのではないだろうか。その彼が敢えて「エグゾティズム」を唱えたのである。最早台湾との間に「空間的・時間的距離」を保持することのできない彼ら長期居住者にとって、敢えて「エグゾティズム」を標榜することにはどのような意味があったのだろうか？

実際、彼らにとって台湾的な素材を多用しただけの詩は、エグゾティックな感興を呼び起こしはしなかった。島田は西川の詩について、「観音山」、「紅毛城」、「蓬萊閣」などの台湾的な詩材は、「実景を知るものに生きたる現実感を与へるの益があるが、一步を誤ると案内記風なものに墮しやう」と述べている<sup>57</sup>。つまり、リアルではあるが、エグゾティックではないのである。島田は「このあまりにも著しい現実感を、縹渺たる詩境に誘導するため」、西川がロマンティックな道具立てとして、台湾特有の漢語や動植物名だけでなく、仏教用語から、伝統的な風流味のある日本語までをふんだんに用いたと見ている。

西川がこうした『『異国趣味』そのものための『異国趣味』のかきあつめ』に終わりがねない詩材にこだわったのは、反対に彼がいかに台湾の日常に埋没する危険と隣り合わせていたか、の表れともとれる。島田は西川に対し、「西川氏の芸術の根本傾向は、出来るだけ所謂『現実感』を離れ、現実生活から捨象された芸術的空想の世界を創ろうとするところにある」と述べているが、「芸術的空想の世界」としてエグゾティックな台湾を創出するのでない限り、西川にとって台湾はあまりにも「現実」的でありすぎたのではないだろうか。これは在台日本人に共通する悩みであったかもしれない。

旅行者や台湾に移住して間もない日本人にとって、内地とは異なる台湾の景観や風俗習慣は、作家たちのイマジネーションを刺激し、創作意欲を大いに高めたであろう。しかし、滞在が長引くにつれ、エグゾティックと思われた感興は次第に薄れ、見慣れぬ風景が慣れ親しんだ生活の一部となったとき、在台日本人は何を、どう書くべきか、という問題に直面する。旅行者や台湾にやってきて間もない居住者には「美しい」、「面白い」、「神秘的」と見えるものが、滞在が長引くにつれ、次第に見えなくなって来るのである。実際、「台湾の生活が気候風土の関係その他のため内地の生活に比しだれ気味になるは争はれぬ」ことであった<sup>58</sup>。

では、日常的で、関心を引き起こさなくなってしまったこの現実を乗り越えるため、文学的に有効な方法として何が考えられたであろう。例えば、短歌や俳句に度々見られるように、狭い日常生活に限定し、自然や人生に対する観照を研ぎ澄ませていくことは一つの方法であった。また、台湾人に共感を示す作家たちのように、植民統治のもたらす暗黒面をも含め、徹底的に台湾の現実に向き合ってみる、というリアリズムの方法もあった。さらに台湾を再度「エグゾティズム」の対象とし、その美しさや神秘性を再発見し、同じ在台の読者に新たな感興を喚起していく、と

いうのも一つの方法だったのである。つまり、台湾における内地人の文芸が「自治」の確立を目指していた当時、台湾居住者による、台湾居住者のための「エグゾティスム文学」は、在台日本人文学のテーマたりえたのだ。

それを可能にしたのが、日本近代詩における「エグゾティスム」の系譜であろう。李太郎が江戸情緒の残る東京に対して行った他者の視線に同化して、此処／自己を「異化」する方法、或いは白秋が生まれ故郷柳川の滅び行く風物を、外国語のような土語・俗語を駆使してエグゾティックに歌い上げた方法などは、確かに、再び台湾を現実から引き離し、詩的空間として理念的に創出することを可能にしたはずである。

実際、伊良子清白や西川満、さらに新垣宏<sup>59</sup>等、台湾長期居住者の「エグゾティスム」は、日本近代詩における「エグゾティスム」の系譜から内的に導かれた感が強く、旅行者や短期滞在者のそれとはかなり様相を異にしているのがわかる。彼らの作品が成功したか否かは別として、彼らが学んだのは日本近代詩の中で育まれた、既知の土地を対象に創出する「自己異化」の「エグゾティスム」形式であり、島田が在台日本人に求めたのも、それであった。島田自身、長期居住者として台湾の現実に向き合うべきかという課題を抱えていたからであろう。島田もまた鈍磨しかかっていた精神を覚醒させるため、此処／自己を再度エグゾティックな感興の対象とする「自己異化」の契機を必要としていたのではないだろうか。

## むすびにかえて

以上見てきたように、島田謹二は単なる中央文壇進出のため、在台日本人の文学に「エグゾティスム」の必要性を主張したわけではなかった。島田にとって「エグゾティスム」とは、佐藤春夫の「女誠扇綺譚」に見られるような、抒情性や芸術性の同義語であると同時に、山本孕江の主張するような、台湾本来の姿に内側から迫ろうとする試みであり、何よりも台湾に長期居住する日本人が自己に向き合うための一つの方法であった。それによって、彼は台湾文芸の向上を願ったのである。

但し、台湾というトポスが日本帝国の植民地である以上、台湾島内の文学的課題が内地の中央文壇との関係を抜きに考察されることはなかった。和泉司によると、台湾人の日本語作家たちは1930年代、「台湾文壇」や「台湾文化」の確立・向上という目標と、「中央文壇」との連携・進出という志向を矛盾することなく持ち合わせていたというが<sup>60</sup>、在台日本人作家たちもまた、中央文壇を視野に入れつつ、台湾固有の文学的加課題に取り組んでいたのである。

島田謹二も同様、在台日本人文学の確立・向上という目標を、台湾島内だけで完結させていたわけではない。『華麗島文学志』の執筆についても、「改隸後の台湾に於ける日本文学について究めることは、日本文学の外地的發展史の一章を成し、学界に新しい領域を拓くものであろう」<sup>61</sup>との野心を抱いていた。それによって、内地の文学研究のあり方に一石投じようとしたのである。島田のこうした野心は、「今日、わが国文学、特に現代文学の取扱ひ方は、極端に中央に偏して、また地方を顧みようとしない。況や外地の文学現象などは全く齒牙に掛けてゐないのである」<sup>62</sup>と

いう中央批判と、地方文化を育成したいという「<sup>レジオナリスム</sup>地方主義」の精神に支えられていた。さらに、台湾という外地で、「比較文学」という新しい学問を打ち立てようとしていた気負いもある。

元々、島田謹二にとって在台内地人文学の研究は、それまで森鷗外や上田敏を対象に進めていた、近代日本文学と西洋文学の比較研究と同様、異文化との接触によって起こる日本文学の変容を究めるという「比較文学」的関心の上に立っていた。島田はすでに、「上田敏の『海潮音』—文学史的研究」（『台北帝国大学文政学部文学科研究年報第一輯』、1934）で、西欧近代詩が日本の近代詩にいかなる影響を及ぼしたか、思想・美学・形式・語彙等、あらゆる方面から検討を重ね、さらにその影響を受けた白秋・李太郎等が自由口語詩に新生面を開いたことを論じていた。そうした流れを汲む日本近代詩が台湾という外地に進出したとき、いかなる変容を被るか、それを究めたいという動機が『華麗島文学志』執筆の出発点にあったのである<sup>63</sup>。そうした島田の思いは研究の進展と共により積極的になり、台湾の日本文学は内地の日本文学に何を寄与できるのか、台湾的なものの「受容」のみならず、台湾的なものの「発動」を考察するまでに発展していった。それは西川満を論じる際に最も鮮明に現れている。

島田は西川の詩に、南島特有の「明るいもの、透きとほつたもの、味のこつてりと花やかなもの」、あるいは「具象的、造形的、論理的」な精神を見出しているが、そうした西川作品に溢れる、調和のとれたグレコ・ラテン的な明るい神秘は、それまで日本文壇では軽視されていた。重視されていたのは、「『人生』的、『思想』的、『現実』的」な、所謂「北欧系統の文学観」である。そこに西川満が登場し、「南欧的 *classique* の精神を以つて急に詞壇の視聴を惹いた」のであった。島田の西川に対する過剰ともいえる期待は、時にどこまで本気なのか疑いたくなるほどだが、台湾から内地の日本文学に新たな南方的価値観や美意識を提供できるのは、まず西川だったのであろう。長期居住者の「エグゾティズム」には、そうした役割も期待されていたのであった。

しかし、台湾から内地へ向けて発信されるべき文学的な野望とは、植民地主義的な意図と紙一重である。

西川氏のこの詩集[『媽祖祭』]は、伊良子氏の精神の或るものを受け継ぎ、相並んで日本近代詩史の上にはじめて「台湾」を登録せしめた。この華麗島の自然と風物とは、今迄日本内地の詩人の十分に取り上げなかつたこの新世界は、ここに豊麗婉美な新芸術と化せられて、美事に詩壇に寄与せられたのである。これこそまさに新領域の附加として、詩史上に特筆せらるべき出来事ではないか<sup>64</sup>。

ここにいう「新領域」とは芸術上の「新領域」であると同時に、日本帝国が獲得した「新領土」でもある。島田にとってエグゾティックな「外地の特殊なる景観描写」とは、取りも直さず日本帝国が獲得した「新領土」を「豊麗婉美な新芸術」として言語化し、日本文学の「新領域」とすることに他ならなかつた。西川的な南方「エグゾティズム」を通して、「芸術的な香芬」につつまれた美しき新領土「台湾」は、内地の日本文学に取り込まれ、日本文学史に登録される。それは軍事的制圧によって始まった台湾の植民地化が、政治・経済的なシステムによる本国への従属化

を経て、文化レベルでの取り込みに至り、ようやく完成していく最終段階に重なっていた。結局、島田の言う「外地景観描写の文学」という「エグゾティスム」は、「芸術的な香芬」という美しいパッケージとは裏腹に、台湾の既得権を主張し、植民統治の正当化を主張する、極めて政治的な機能を発揮することになったのである。

## 注

- 1 島田謹二はフランス語の *exotisme* を「エグゾチスム」と訳しているが、本稿では原則として、「エグゾティスム」とする。引用箇所は原典に従い、英訳「エキゾティシズム」もそのままとする。形容詞についても、本稿ではフランス語 *exotique* の訳語「エグゾティック」を用いるが、引用箇所は原典に従う。
- 2 松風子「台湾に於けるわが文学」（『台湾時報』、台湾総督府情報部、1939年）56頁。松風子は島田謹二のペンネーム。
- 3 1940年7月、中村哲が『文芸台湾』に「外地文学の課題」を発表したのを皮切りに、42年9月の竹村猛「作家の態度」まで続いた。関連論文は以下の通り：中村哲「外地文学の課題」（『文芸台湾』1-4、1940.7）、龍瑛宗「外地文学の展望」（『大阪朝日新聞』台湾版、1941.2.2）、濱田隼雄「台湾文学の春に寄せて」（『台湾日報』、1941.3.7）、島田謹二「台湾の文学的過現未」（『文芸台湾』2-2、1941.5）、黄得時「台湾文壇建設論」（『台湾文学』1-2、1941.9）、中村哲「昨今の台湾文学について」（『台湾文学』2-1、1942.2）、龍瑛宗「南方の作家たち」（『文芸台湾』3-6、1942.3）、竹村猛「作家の態度」（『台湾公論』1942.9）。これら一連の議論については、橋本恭子『島田謹二《華麗島文学志》研究—以「外地文学論」为中心—』（台湾国立清華大学中国文学系碩士論文、2003年）の第五章第三節「1940年代的異国情緒與写実主義」（162-201頁）で論じた。
- 4 和泉司は「憧れの「中央文壇」——一九三〇年代の「台湾文壇」形成と「中央文壇」志向—」（『文学年報2 ポストコロニアルの地平』、世織書房、2005年8月）で、黄得時によって打ち出された台湾文壇対立構造の恣意性について、詳細に論じている。
- 5 戦後初期の「エグゾティスム」及び島田謹二批判としては、龍瑛宗「日人文学在台湾」（『台湾文物』第3巻第3期、台北市文献委員会、1954年12月、18-22頁）がある。1940年代の議論を受け継ぐ近年の代表的なものには、王昭文『日据時期台湾的知識社群—『文芸台湾』・『台湾文学』・『民族台湾』三雑誌的歴史研究—』（国立清華大学歴史系碩士論文、1991年、32-60頁）、及び陳建忠「尋找熱帶的椅子—論龍瑛宗一九四〇年的小説—」（『日据時期台湾作家論—現代性・本土性・植民性—』、五南圖書出版公司、2004年8月、175-208頁）が挙げられる。王は黄得時の、陳は龍瑛宗の批判を踏襲しつつ、島田謹二の「エグゾティスム」が内地の中央文壇を目指す、植民地主義的な意図に裏付けられたものであると批判している。但し、いずれの論者とも島田の言う「エグゾティスム」そのものには触れていない。
- 6 その他の著作については、以下の通り：Pierre Martino, *L'Orient dans la Littérature Française aux XVIIe et XVIIIe Siècles*（『17-18世紀のフランス文学におけるオリエンタ』）、Paris：Hachette, 1906；Charles Tailliart, *L'Algérie dans la littérature française*（『フランス文学におけるアルジェリア』）、Genève：Slatkine Reprints 1999（1<sup>er</sup> ed. Paris：1925）；Roland Lebel, *L'Afrique Occidentale dans la littérature Française (depuis 1870)*（『（1870年以降の）フランス文学における西アフリカ』）、Paris：Emile Larose, 1925；Roland Lebel, *Etudes de Littérature Coloniale*（『植民地文学研究』）、Paris：J. Peyronnet et Cie, 1928；Frederic Green, *French Novelists from Revolution to Proust*（『フランスの小説家たち—フランス革命からブルーストまで』）、London；Toronto：J.M. Dent & sons Ltd., 1931；Jean Marie Carré, *Voyageurs et écrivains français en Egypte —(1) Du début à la fin de la domination turque, (2) De la fin de la domination turque à l'inauguration du Canal de Suez*（『エジプトにおけるフランス人旅行者と作家たち—（1）トルコ占領時代初期から末期まで、（2）トルコ占領時代末期からスエズ運河開通まで』）、Paris：l'Institut Française d'archéologie orientale, 1932；Gilbert Chinard, *L'Amérique et rêve exotique dans la littérature française au XVIIe et au XVIIIe siècle*（『17-18世紀のフランス文学におけるアメリカ

- とエグゾティックな夢』, Paris : Droz, 1934 ; Louis Malleret, *L'exotisme indo-chinois dans la littérature française depuis 1860* (『1860年以降のフランス文学におけるインドシナのエグゾティスム』), Paris : Larousse, 1934 ; Le Genti, *La Littérature Portugaise* (『ポルトガル文学』), Paris : A. Colin, 1935 ; Pierre Jourda, *L'exotisme dans la littérature française depuis Chateaubriand : le romantisme* (『シャトーブリアン以降のフランス文学におけるエグゾティスム—浪漫主義』), Paris : Boivin, 1938.
- 7 カリオ、レジスマンセ及びルベルの研究書において、exotisme は文学における「エグゾティスム」を意味し、littérature exotique (エグゾティスム文学) の同義語として使われている。なお、littérature exotique の訳語については、「エグゾティスム文学」が定着しているため、本稿でもこれを充てるが、littérature coloniale については、島田謹二の意に従い、「植民地文学」ではなく、「外地文学」とする。
  - 8 Louis Cario et Charles Régismanset “L'Exotisme – La littérature coloniale”, *Mercure de France*, 1911, pp.161~162.
  - 9 ルベルがカロ、レジスマンセの研究を参考にしているため、基本的に両書には共通点が多いが、見解の相違も多々あるため、ここでは最大公約数的な流れを示す。
  - 10 松風子「台湾に於けるわが文学」(前掲書) 50 頁。
  - 11 木下誠「帰なきサイクル—ヴィクトル・セガレンのエグゾティスム—」(『ユリイカ : 特集エグゾティシズム』, 青土社, 1997 年 8 月号) 129 頁。
  - 12 黄得時「台湾文壇建設論」(『台湾文学』1-2, 1941 年 9 月) 7 頁。
  - 13 20 世紀前半の「外地文学」にも反植民地主義を標榜した作品は存在したと思われるが、カロ、レジスマンセ、ルベルはいずれも言及していない。ルベルは『フランスにおける外地文学史』105 頁の脚注で、「政治的傾向のある作品」は研究対象から省いたと明記している。
  - 14 松風子「台湾の文学的過去に就いて」(『台湾時報』, 1940 年 1 月) 157 頁。
  - 15 同上, 144 頁。
  - 16 島田謹二は戦後の座談会で、「佐藤春夫氏の『女誠扇綺譚』について、「現地において実地踏査が可能だったものですから、詳しく調べて、佐藤さんに御覧をいただいたら、そつくりそのままのおほめにあずかりました。その他の点でも、あの研究では、佐藤さんから過分なお言葉をいただいて、大変恐縮しましたが、嬉しかったですね」と述べている。参照：『近代比較文学』を繞る座談会(『比較文学研究』1-1, 東大比較文学会, 1957 年 7 月改定再版, 1954 年 1-6 月初版) 105 頁。
  - 17 アイルランド人の医者の子として、メルボルンに生まれる。”The Fortunes of Richard Mahony” は父親をモデルにした悲劇の三部作。(1870-1946)
  - 18 松風子「佐藤春夫氏の『女誠扇綺譚』」(『台湾時報』, 1939 年 9 月) 79 頁。
  - 19 松風子「岩谷莫哀の瘡癩」(『台湾時報』, 1939 年 10 月) 120 頁。
  - 20 本名ジュリアン・ヴィオ。ブルターニュの港町ロシュフォルに生まれる。海軍士官として世界の海を渡った経験をもとに、トルコ、タヒチ、セネガルなどを舞台に、異国情緒豊かな作品を発表し、19 世紀末、フランスで爆発的に読まれた。日本には二度訪れ、『お菊さん』と『秋の日本』を残している。日本でも大正時代から、野上豊一郎、吉江喬松、渡辺一男などによる名訳がさかんに刊行された。参照：落合孝幸『ピエール・ロチー人と作品一』(駿河台出版社, 1993 年 9 月)。
  - 21 この一文は『前嶋信次著作選 3 〈華麗島〉台湾からの眺望』(東洋文庫 679, 平凡社, 2000 年 10 月)の「前嶋信次著作目録」には記載されていないが、新垣宏一の「ピエール・ロチーと台湾」の中で言及されている。
  - 22 新垣は「先生 [島田謹二] にならって、『ピエール・ロチーと台湾』を発表した、と後に語っている。参照：新垣宏一『華麗島歳月』(張良澤編訳, 前衛出版社, 2002 年 8 月) 73-74 頁。
  - 23 加藤東雄「西洋文化研究会 (B 班)」(『翔風』24 号, 台北高等学校文芸部, 1942 年 9 月) 130 頁。
  - 24 参照：松風子「続香墨記」(『台湾教育』, 1939 年 8 月) 90 頁；『あらたま』歌集二種(『台湾時報』, 1939 年 6 月) 80 頁。
  - 25 松風子「台湾に取材せる写生作家」(『台湾時報』, 1939 年 7・8 月合併号) 102-103 頁。
  - 26 黄得時は 1934 年から 37 年まで台北帝国大学に在籍し、島田謹二と親しくしていた。黄はこの間、台湾文芸連盟の機関誌『台湾文芸』や台湾新文学社の『台湾新文学』に積極的に参加すると同時に、島田の『華麗島文学志』の完成にも尽力している。戦後まで続いた黄と島田の親しい付き合いにつ

- いては、島田謹二の長女である斉藤信子氏より直接お話を伺った(2001年9月7日)。また同氏の『筏かづらの家―父・島田謹二の思ひ出―』(近代出版社、2005年4月、63頁)にも綴られている。
- 27 松風子「佐藤春夫氏の『女誠扇綺譚』」(前掲書) 81頁。
- 28 以下、本節での引用は特別な註がない限り、松風子『『うしほ』と『ゆうかり』』(『台湾時報』、1939年11月)による。
- 29 本名山本昇。『ホトトギス同人』。『台湾時報』や『台湾婦人界』(台湾婦人社)などでも俳句欄の選者を務めた。1942年に『ゆうかり』20周年を記念して刊行された『山本孕江句集』(台北:山本孕江集刊行会、1942)には、高浜虚子が序文を寄せている。他に『ゆうかり俳句集』(山本孕江・三上惜字塔編、台北:ゆうかり社、1935)がある。(1893-1947)
- 30 「台湾俳句」は「台湾句」とも呼ばれた。1931年7月、『ゆうかり』に「台湾句合評」のページが設けられ、台湾俳句の研究が本格的に始まる。翌月からは「台湾句研究」と改題され、1937年7月まで60回ほど連載された。翌8月からは、台湾のみならず、熱帯圏を対象とした俳句を紹介・批評する「雑詠月評」と「熱帯圏」のページに発展する。
- 31 本名村上荘太郎。江戸に生まれ、のち高崎に移る。高崎区裁判所構内代書人の傍ら、子規に教えを請い、『ホトトギス』同人となり、明治・大正・昭和を通じ、優れた俳人として活躍した。(1865-1938)
- 32 松山市湊町生まれ。高浜虚子の次兄・池内信嘉の長男。ホトトギス俳句の一つの典型を示した人として愛媛俳句史に残る人物。写生文も多い。(1869-1874)
- 33 『『うしほ』と『ゆうかり』』に引用された本田一杉のエッセイ「ホトトギスを待つ人々」(『大汝』、鴨野発行所、1939年4月)には、「東台湾の僻地」で句作に励む『うしほ』の同人たちが、内地から船で送られてくる『ホトトギス』を待ちわび、雑詠に入選したかどうかで、一喜一憂する様子が生き生きと描かれている。また、『ホトトギス』系の幹部俳人が来台することもあり、各地を巡歴し、在台俳人に刺激を与えたという。
- 34 松風子「台湾に於けるわが文学」(前掲書) 51及び54頁。
- 35 奈良県に生まれる。本名阿波野敏雄。『ホトトギス』同人。水原秋桜子・山口誓子・高野素十とならび、「四S」と称された。(1889-1991)
- 36 1935年10月に渡台した俳人前田普羅(1884-1954)が「俳句台湾の自治」と表現した。参照:松風子『『うしほ』と『ゆうかり』』(前掲書) 90頁。
- 37 浅野豊美「台湾に関する本100冊、15 島田謹二『華麗島文学志』―日本詩人の台湾体験―」(『台湾史研究』13、台湾史研究会、1997年)、159-160頁。
- 38 島田謹二は1934年に内地帰還のチャンスを迎えるが、「漸く蔗境に入りかけていた専攻の学問をまとめたい」という理由で断り、台湾に残った。参照:松風子「台湾の文学的過去について」(前掲書) 155-156頁。
- 39 1930年代後半の在台日本人の文学については、橋本恭子「転換期在台内地人之文芸意識的改変(1937.7-1939.9)」(『台日研究生台湾文学学術研討会、発表論文集』、文建会、2003年10月)で論じた。また、中島利郎「日本統治期台湾文学研究―日本人作家の抬頭―西川満と「台湾詩人協会」の成立―」(『岐阜聖徳学園大学紀要』第44集、2005年2月)を参照した。
- 40 菅原克也『『南蛮』から『華麗島』へ―日本近代詩におけるモダニズムと植民地―』(台湾大学日本語文学系シンポジウム日本語発表稿、2002年4月) 3頁。
- 41 近代日本文学における「エグゼティズム」については、本稿で引用したもの以外、西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム―大正日本の中国幻想―』(中公叢書、2003年7月)を参考にした。
- 42 菅原克也『『南蛮』から華麗島へ―日本近代詩におけるエグゼティズム―』(『ポスト・コロニアリズム―日本と台湾―』、比較文学比較文化論文集、東京大学比較文学比較文化研究室、2003年5月) 128頁。
- 43 同上。「ミニヨンの歌」(原詩はゲーテの『ヴィルヘルム・マイステルの修業時代』第3巻第1章冒頭)については、『鷗外全集』(第19巻、岩波書店、1988年6月、第二刷)、14頁より引用した。
- 44 島田謹二が「異国情調」の例として挙げているのは、ルコント・ド・リールの「象」という詩である。第一連を引く。「砂漠は丹の色にして、波漫漫たるわだつみの／音しづまりて、日に燬けて、熟睡の床に伏す如く／不動のうねり、おほらかに、ゆくらゆくらに傳はらむ／人住むあたり 銅の雲、

- たち籠むる眼路のすゑ。」（「上田敏の『海潮音』—文学史的研究—」（『台北帝国大学文政学部文学科研究年報第一輯』、1934、302頁）
- 45 島田謹二は青年時代から北原白秋を愛読していたが、1934年、白秋が台湾総督府に招かれて訪台した際、矢野峰人とともに接待役を勤めた。木下杢太郎は本名太田正雄、皮膚科の医学博士で、島田が東北帝国大学在学中、医学部の教授であった。法文学部の教授らが組織した「芭蕉俳諧研究会」にも参加し、同会の筆記役であった島田は多大な影響を受けた。
  - 46 彌永信美「『狗国』から『邪宗門』まで—エグゾティシズムの認識論・近世—近代日本のエグゾティシズム—」（『ユリイカ 特集エグゾティシズム』、1997年8月）114頁。
  - 47 同上、115頁。
  - 48 渡辺一民「フランスの誘惑—明治の留学生たち—」（『文学』4-1、岩波書店、1993年冬）135頁。
  - 49 同上。
  - 50 島田謹二は伊良子清白の在台期間を「明治四十三年五月から大正五年二月にかけて」と記しているが（『伊良子清白の『聖廟春歌』』、60頁）、『伊良子清白全集』第2巻（岩波書店、2003年6月）の年譜によると、清白が内地帰還を決意し、基隆を出港したのは「大正七年四月十五日」であった。
  - 51 松風子「伊良子清白の『聖廟春歌』」（前掲書）60頁。なお、台湾時代の清白については、『伊良子清白全集』第2巻「日記（抄）」に、大正5年と6年の日記が収録されている。また、平出隆の『伊良子清白・日光抄』（新潮社、2003年10月、49-72頁）にも詳しい。
  - 52 松風子「伊良子清白の『聖廟春歌』」（前掲書）、69頁。
  - 53 西川満は1930年、早稲田大学仏文科に入学、吉江喬松や西条八十から教えを受け、卒業論文は『アルチュル・ランボオ』であった。
  - 54 中島利郎「西川満と日本統治期台湾文学—西川満の文学観—」（『よみがえる台湾文学』、東方書店、1995年10、418頁）から引用。中島はこの点に注目し、後に加筆訂正した同論文で、「素材を素材のままに描くのではなく、そこに何らかの想像力（或は加工）を加えねばという西川の文学観は、このような—つまりマンカには興味をもてず、東洋と西洋の混淆が見られる大稲埕が魅力である—という点に根源があると考えられる」と論じている。参照：中島利郎『日本統治期台湾文学研究序説』、緑陰書房、2004年3月、15頁。
  - 55 西川満『わが越えし幾山河』、人間の星社、1990年6月、19頁。
  - 56 菅原克也「『南蛮』から華麗島へ—日本近代詩におけるエキゾティシズム—」（前掲書）、123頁。
  - 57 以下、本節での引用は註がない限り、松風子「西川満氏の詩業」（『台湾時報』、1939年12月）による。
  - 58 森田馨造「短歌漫想」（『原生林』2-11、1936年2月）17頁。
  - 59 新垣宏一は高雄に生まれ、台北高等学校を経て、1934年台北帝国大学文政学部文学科国語国文学専攻に入学。大学時代から『文芸台湾』時代に至るまで、一貫して白秋・杢太郎の「南蛮趣味」を強く意識した詩を発表し、芥川龍之介の「南蛮もの」の代表作「奉教人の死」に関する論文も『台大文学』（1-2、1936）に発表した。
  - 60 和泉司「憧れの「中央文壇」—一九三〇年代の「台湾文壇」形成と「中央文壇」志向—」（前掲書）、144頁。
  - 61 松風子「台湾の文学的過去に就いて」（前掲書）156頁。
  - 62 同上、157頁。
  - 63 橋本恭子「島田謹二『華麗島文学志』の研究対象について」（『ポストコロニアリズム—日本と台湾—』、比較文学比較文化論文集、東京大学比較文学比較文化研究室、2003年5月）146-147頁。
  - 64 松風子「西川満氏の詩業」（前掲書）56頁。